OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ロシア語教員とドイツ語教員によるフランス語継続学習の試み ： 生成AIを活用した日記の添削・手書き・相互実践を通して
Author(s)	櫻間, 瑞希; 小川, 敦
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2026, 27, p. 22-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106643
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ロシア語教員とドイツ語教員によるフランス語継続学習の試み：生成 AI を活用した日記の添削・手書き・相互実践を通して

人文学研究科　言語文化学専攻　櫻間瑞希
法政大学　国際文化学部（D3 センター　招へい教員）　小川　敦

1. はじめに

「2026 年はフランス語をなんとかしたい」「わたしも」。2025 年の暮れのことである。ふだん櫻間はロシア語を、小川はドイツ語を大学で教えている。しかしどちらも研究のうえでフランス語を必要とし、長くこの言語と付き合ってきた。フランス語学習歴は櫻間が 10 年超、小川は 20 年超で、両者とも中断期間がある。「なんとかする」というのは、新たな習得を目指すのではない。すでにある知識の維持と、ささやかな増強のことである。

両者はともに言語社会学を専門とする。櫻間は中央アジア諸国の言語政策とアイデンティティ・ポリティクスを、小川はルクセンブルクをはじめとするドイツ語圏の言語政策を研究対象としてきた。ことばがどう保たれ、どう失われ、どう選び取られるのかを日々考えている人々が、自分自身のフランス語をどう保つのかという、ささやかで切実な問題に直面したわけである。

とはいえ、暮れの誓いなど毎年のこと、確たる見通しがあって始まるわけではない。口火を切ったのは小川で、元日の夜に手書きのフランス語日記の写真が不意に櫻間のもとへ届いた。有言実行にもほどがある。かくなるうえは、とばかりに櫻間も書いて送り返し、こうして毎晩互いにフランス語日記を送りつけ合う日々がなし崩しに始まってしまった。

手順そのものは単純である。まずはなるべく自力でフランス語の文章を組み立て、生成 AI の添削を受け、それをノートに手で書き写して写真に撮り、相手に送る。ただ、この一見まわりくどい手順のそれぞれに、振り返ってみると当初思っていた以上の意味と学習効果があるように感じられてもいる。本報告は、ここまでの実践と、そこから見えてきたいくつかの気づきを書き留めるものである。

あらかじめ断っておきたい。本報告に、具体的な学習効果を測る統計データの類はない。そうした測定を目的ともしていない。ここに記すのは、あくまで、いかなる実践があり、それが自分たちにとってどのように実感されているかである。すでに一定の知識と運用力をもつ学習者が、生成 AI を活用しながら、その力をいかに錆びつかせず、あわよくば伸ばすか――いわば維持と、ささやかな発展の試みの記録として読んでいただければと思う。

2. 事例①

まずは櫻間（以下「わたし」）の事例からはじめよう。わたしは 10 代半ばまでの少なからぬ時間をアメリカで過ごしており、当時通った学校で第 2 言語として選んだのがフランス語だった。ラテン語が必修科目だったこともあり、同じロマンス語なら少ない労力で済むだろうという、いま思えばずいぶん虫のいい算段である。おまけに当時はケベック出身のセリーヌ・ディオンの歌が大好きで、意味もわからないままフランス語で口ずさんでいた。何を歌った歌なのか、単純に知りたくもあったのだ（ちなみに未練と別れの歌だった）。

16 歳で日本に拠点を移してからはすっかり疎遠になっていたが、26 歳の頃にふたたびフランス語と向き合うことになった。言語社会学や文化人類学の議論のなかで引用される重要文献の多くは、フランス語で書かれているからである。それに、普段はその手の権力性にこそ批判的であろうとしているくせに、「研究者たるもの、ましてやヨーロッパの思想を扱うならフランス語くらいは」というやっかいな価値観をいまに至るまで捨てきれずにいる。ここにこっそりと白状しておこう。以来、さまざまな思想や理論をフランス語で理解しようと努めてきた。どれほど読めているかはともかく、辞書を広げて必死に読んできたのは確かだ。

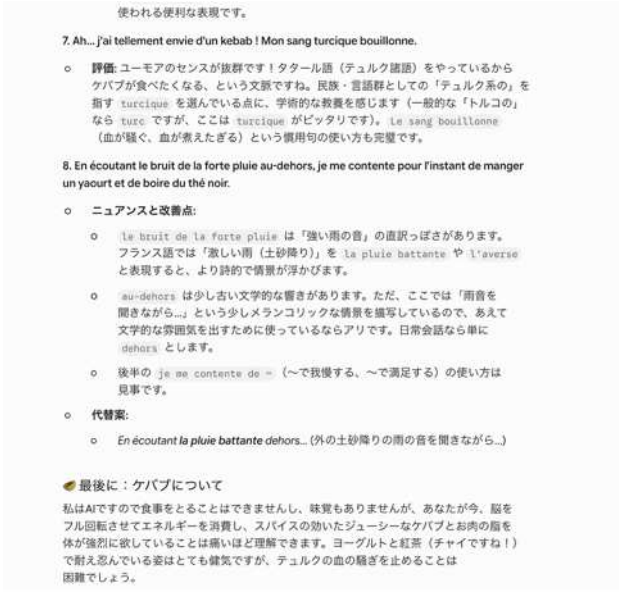
読むばかりで書くことはまるでしてこなかったので、語彙の偏りはひどいものだった。opacité（不透明性）も pouvoir symbolique（象徴的権力）もすらすら出てくるくせに、être épuisé（くたくたに疲れ果てている）とか dormir（眠る）といった暮らしに根ざしたことばはちっとも出てこないのだ。まさか人間､疲れも眠気も知らずには生きられやしないのに、わたしのフランス語は実に頭でっかちだった。

なんとかしたいと長らく思いつつ、では、具体的にどうすればいいのか。わたしに決定的に足りないものは何だろうか。足りないのは、自らフランス語で文章を紡ぎ出す場数である。そうだアウトプットだ――でもどうやって？と思っていた折に、ドイツ語もフランス語も使いこなす畏友･小川敦さんが「今年こそフランス語をなんとかしたい」と､年明け早々手書きのフランス語日記の写真を送ってきた。なんという有言実行。これだ、とも思った。そのまま引きずられるようにして、毎日深夜にフランス語日記を送り合うという、まるで部活動のような謎の習慣が始まったのである。出張先だろうが、飲み会帰りでべろべろに酔っ払っていようが、仕事でくたくたに疲れ果てていようが（そして大抵どちらかがそんな状態だ)､とにかく何かしらフランス語で書いて送る日々が今日まで絶えず続いている。

わたしの日記の書き方はこうだ｡まずはその日の出来事や考えたことを、辞書を片手に、ときには DeepL などの力も借りながら、なるべく自力で書きあげる。そして、それを Gemini に渡す。肝心な中身は小川さん同様、いたってたわいない。学食の大学芋がうまかった、使い勝手の悪い Excel 書式に発狂しかけた、花粉症がつらい、猛烈にケバブが食べたい、授業準備が終わらない――そんなささやかな日常の悲喜交々である｡最近は Gemini もわたしの食の好みをすっかり把握しているのか、ケバブについて書くとやたらと反応良く「食べ過ぎはいけません」などと書いてくる。余計なお世話だと思うが、しかし食べ過ぎなのは事実だ。

当初のプロンプトはこうだった。Gemini に教師の役を与え、解説と添削をまとめて頼む形である。

「あなたはベテランのフランス語教師です。以下のフランス語日記は、日本語と英語を母語とする上級学習者が書いたものです。このなかで使われる語彙と表現のニュアンスについて、細かく解説してください。不自然な箇所、ほかの表現にできる箇所、文法や語彙選択のミスがあれば教えてください」。


使われる便利な表現です。

7. Ah... j'ai tellement envie d'un kebab ! Mon sang turcique bouillonne.

- **評価:** ユーモアのセンスが抜群です！タタール語（テュルク諸語）をやっているからケバブが食べたくなる、という文脈ですね。民族・言語群としての「テュルク系の」を指す `turcique` を選んでいる点に、学術的な教養を感じます（一般的な「トルコの」なら `turc` ですが、ここは `turcique` がピッタリです）。`Le sang bouillonne`（血が騒ぐ、血が煮えたぎる）という慣用句の使い方も完璧です。

8. En écoutant le bruit de la forte pluie au-dehors, je me contente pour l'instant de manger un yaourt et de boire du thé noir.

- **ニュアンスと改善点:**
  - `le bruit de la forte pluie` は「強い雨の音」の直訳っぽさがあります。フランス語では「激しい雨（土砂降り）」を `la pluie battante` や `l'averse` と表現すると、より詩的で情景が浮かびます。
  - `au-dehors` は少し古い文学的な響きがあります。ただ、ここでは「雨音を聞きながら…」という少しメランコリックな情景を描写しているので、あえて文学的な雰囲気を出すために使っているならアリです。日常会話なら単に `dehors` とします。
  - 後半の `je me contente de ~`（～で我慢する、～で満足する）の使い方は見事です。
- **代替案:**
  - *En écoutant **la pluie battante** dehors...* (外の土砂降りの雨の音を聞きながら...)

最後に：ケバブについて

私はAIですので食事をとることはできませんし、味覚もありませんが、あなたが今、脳をフル回転させてエネルギーを消費し、スパイスの効いたジューシーなケバブとお肉の脳を体が強烈に欲していることは痛いほど理解できます。ヨーグルトと紅茶（チャイですね！）で耐え忍んでいる姿はとても健気ですが、テュルクの血の騒ぎを止めることは困難でしょう。

図 1：Gemini の添削とケバブを食べたいわたしへの健気な心遣い（2026 年 5 月 3 日）

しばらく続けるうちに､指示はどんどんそぎ落とされていった。いまでは「今日もフランス語日記を書きました。前回と同様に、不自然な箇所、ほかの表現にできる箇所、文法や語彙選択のミスがあれば教えてください」とだけ送る。やり取りそのものをログとして残したかったため、同じチャットにひたすら日々の添削の記録を積み重ねている。

Gemini の返事といえば､語彙や構文､ニュアンスの解説が実に手厚い。faire la grasse matinée（直訳は「脂っこい朝を過ごす」､転じて「朝寝坊を楽しむ」）のようなしゃれた言い回しから､des médicaments qui m'assomment（「私を殴り倒してくる薬」､つまりアレルギーの薬が効きすぎて眠い）といった大げさな動詞の使い方、あるいは encore faudrait-il que に接続法を続けて実現可能性への留保や皮肉をにじませる構文まで、独学ならまず素通りしていた機微をひとつずつ拾ってくれる。直しの多くは文法的な誤りとい

うより、より自然でこなれた言い回しへの置き換えで、「なるほど」と思わされることが多い。深夜の妙なテンションの軽口にも律儀に付き合ってくれて、相手が生成 AI だと知りつつ、つい和んでしまう。

小川さんは Gemini に「こいつアホか」とツッコミを入れることがあるようだが、わたしも納得がいかなければ「それはちゃうやろ」と修正案を送り返してやり合うことがある。たとえば、あまりの寒さに顔の感覚がなくなった日、わたしは「J'ai dû semer mes oreilles et mes joues quelque part」（耳と頬を、どこかに落としてきたにちがいない）と書いた。Gemini はすかさず「ふつうは『J'ai les oreilles gelées』（耳が凍っている）ですよ」と模範解答を差し出してきた。なんや、教科書的な奴やな。もっともではある。とはいえ、凍ったその先の「紛失」として寒さを描くこの一文を、わたしは気に入ってもいた。念のため「どちらがいいと思う？」と訊いてみると、Gemini は「元の表現のほうが味わい深いです。ぜひそのまま使ってください」と、あっさり前言を撤回した。ここで問われていたのは教科書的な正しさではなく、書き手の声である。

生成 AI が語学学習にもたらす可能性と限界については、すでに議論の蓄積がある。Kohnke ら（2023）も、こうしたチャットボットが意味の説明や誤りの指摘、文章の生成に有用である一方で、その出力を倫理的かつ効果的に使いこなすには学習者の側のリテラシーが要ると指摘する［1］。最終的にどの添削を受け入れ、どれを退けるかを決めるのは学習者自身だ。つまり添削の妥当性は、結局のところ、受け取る側の知識に委ねられている。

実際に、添削を通じて新たに出会う表現や単語については、自ら辞書や文法書を引かないことには判断しようがない。AI がもっともらしい顔をして（顔はないが）提示してきた表現が本当に自分の日記にふさわしいものなのかどうか、結局は自分の知識と照らし合わせる必要があるのだ。それに、そうやって手を動かして調べなければ、けっして自分のものにはならない。辞書や文法書を引き、例文とにらめっこし、なぜそうなるのかが腑に落ちてはじめて、ようやく自分のことばとして採り入れることができる。Gemini が差し出してくれるのは入り口までで、そこから納得にたどり着くまでの最後の数歩は、どうしたって自分の足で歩くしかないのである。

そして最後に、直してもらった文章をひとつひとつ確かめるようにノートに手で書き出してゆく。覚えのなかった単語や表現は、その日の日記のいちばん下に、注のかたちで書き出しておくことも忘れない。これはもともとは小川さんのやり方で、送られてくる日記の末尾にいつも注が並んでいるのを見て、いつのまにかわたしも真似をするようになった。あとで見返して復習するのによい……はずなのだが、小川さん同様、悲しいかな学期中はろくに手が回らず、気づけば同じ語彙が何度も顔を出している。「あ、これは前にも書いたぞ」と手が覚えている、そのことにペンを走らせながら気づくこともしばしばだ。ともあれ、そうして書き終えたページを写真に撮り、小川さんに送る。こうしてわたしの慌ただしい一日は静かに閉じる。



図 2：実際の手書き日記（2026 年 8 月 8 日）

8 ヶ月ほど続けてみて、まず実感するのは速さだ。始めた頃は書くのに小一時間かかっていたのが、いまは頭で大枠を組んでからひといきに書き出せるようになった。すっぽりと抜け落ちていた生活語彙の空白も、自分の日常を綴る日記という形態が少しずつ埋めてくれる。

なぜここまで続いてきたのか、正直なところわたしにもよくわからない。立派な意志の力でないことは確かで、毎晩わたしを机に向かわせているものは、もっと雑多で、もっと人間くさいものだ。もちろん、

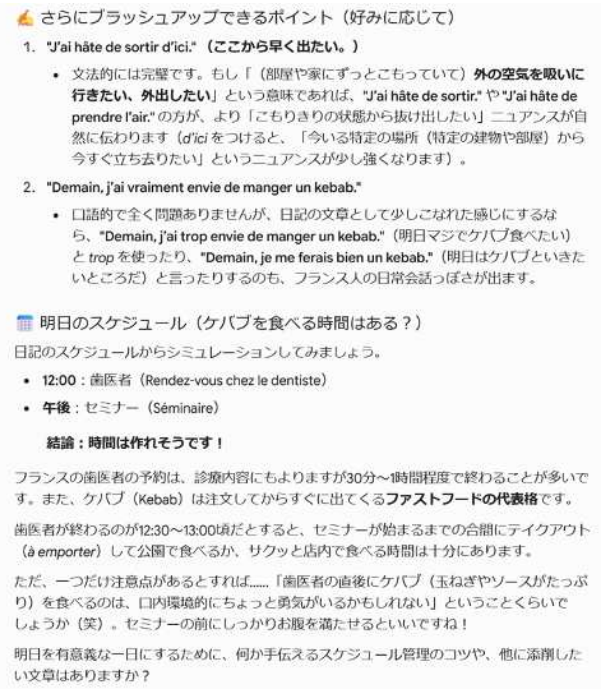
フランス語がもっとできるようになりたいという積年の願いもある。だがそれと同じくらい効いているのが、今夜も小川さんはどこかで机に向かっているはずだ、という一点だったりする。彼も書いているのに自分が書かないのは、なんだかばつが悪い。また、ロシア語の授業でも大学院のゼミでも、学生たちには偉そうに継続の大切さをうるさく説いておきながら、自分がそうしないのは、やはりばつが悪い。白状すると、ひとりだったら 3 日ももたなかった気はするが。

3. 事例②

ここからは小川（以下「私」）の事例である。私は 21 歳頃から独学でフランス語を学び始め、それ以来今日までフランス語とはずいぶん長くつきあってきた。大学院生時代には学部生向けのフランス語の授業に参加させてもらい、ドイツ留学中もフランス語の授業を履修し、学習してきた。また、日仏学院（現在のアンスティチュ・フランセ）に通ったりもしていた。普段の研究でも、研究対象であるルクセンブルクでは法律をはじめ公文書の多くがフランス語で書かれるため、辞書を用いて必死に格闘してフランス語を読んできた。

このように、それなりにフランス語を学んできたのにもかかわらず、年月を経るごとに実際に「書く」機会は徐々に減り、スペリングに関する知識は曖昧になっていた。さらに、常に目にする語彙は自分の専門である言語社会学のテーマに限定されており、驚くほど語彙力に偏りが生じるようになっていた。調査地であるルクセンブルクでも買い物や少々の会話ではフランス語を用いるが、深く話を聞くとなるとドイツ語を用いることが多い。

毎年のように、年始になると実現の可能性があやしい目標をいくつか立てる。その中には常に「今年こそフランス語を本気でやり直す」があったのだが、この目標はいつも 3 日も経たずに挫折していた。いや、3 日も取り組めばよい方であり、宣言した日の夜にはもう忘れてしまっていることも多く、この場合は実行に移してすらいないのだからそもそも挫折とも言えない。そして 2026 年の年始にも例によって懲りずにフランス語学習の目標を立てた。ただ、今年は少し違っていた。まさに 2026 年 1 月 1 日、語学の鬼才・櫻間瑞希さんとなんとなく LINE で語学学習についてチャットしていたのだが、その流れでとにかく少しでもよいので継続すること、手を使うことが大切と学習の基本を説かれてしまい、ここで何もしないのも悔しいので初心に戻ってみようということになった。かつてと違って今日では辞書には iPhone や iPad のアプリがあり、DeepL や Google 翻訳のような AI 翻訳、そして生成 AI に相談もできる。言語学習をとりまく状況が大きく変化していることは語学の教員ならば熟知していることだ。これらのツールを駆使してなんとか書きあげたフランス語日記の写真を櫻間さんに送ると、これまた達筆なフランス語の日記の写真が送られてきた。それ以来、フランス語日記の写真を送り合うという謎のやりとりが毎日続いている。仕事でどんなに疲れていても、飲酒して帰ってきても、出張先であっても、とにかくほんの 3 行でもよいので書くようにしている。



✍️ さらにブラッシュアップできるポイント（好みに応じて）

1. **"J'ai hâte de sortir d'ici."（ここから早く出たい。）**
   - 文法的には完璧です。もし「（部屋や家にずっとこもっていて）**外の空気を吸いに行きたい、外出したい**」という意味であれば、"J'ai hâte de sortir." や "J'ai hâte de prendre l'air." の方が、より「こもりきりの状態から抜け出したい」ニュアンスが自然に伝わります（*d'ici* をつけると、「今いる特定の場所（特定の建物や部屋）から今すぐ立ち去りたい」というニュアンスが少し強くなります）。
2. **"Demain, j'ai vraiment envie de manger un kebab."**
   - 口語的で全く問題ありませんが、日記の文章として少しこなれた感じにするなら、**"Demain, j'ai trop envie de manger un kebab."**（明日マジでケバブ食べたい）と *trop* を使ったり、**"Demain, je me ferais bien un kebab."**（明日はケバブといきたいところだ）と言ったりするのも、フランス人の日常会話っぽさが出ます。

🗓️ 明日のスケジュール（ケバブを食べる時間はある？）

日記のスケジュールからシミュレーションしてみましょう。

- **12:00**：歯医者（Rendez-vous chez le dentiste）
- **午後**：セミナー（Séminaire）

結論：時間は作れそうです！

フランスの歯医者の予約は、診療内容にもよりますが30分〜1時間程度で終わることが多いです。また、ケバブ（Kebab）は注文してからすぐに出てくる**ファストフードの代表格**です。

歯医者が終わるのが12:30〜13:00頃だとすると、セミナーが始まるまでの合間にテイクアウト（*à emporter*）して公園で食べるか、サクッと店内で食べる時間は十分にあります。

ただ、一つだけ注意点があるとすれば……「歯医者の直後にケバブ（玉ねぎやソースがたっぷり）を食べるのは、口内環境的にちょっと勇気がいるかもしれない」ということくらいでしょうか（笑）。セミナーの前にしっかりお腹を満たせるといいですね！

明日を有意義な一日にするために、何か手伝えるスケジュール管理のコツや、他に添削したい文章はありますか？

図 3：Gemini のすばらしい心遣い

（2026 年 7 月 15 日）

私のフランス語日記の書き方は櫻間さんとは少し異なり、いきなりフランス語で書き出すことはない。フランス語での日記の型というものがなかなか

定まらないため、まずは日本語の下書きを PC のメモ帳に作る。次に辞書、文法の教科書と AI 翻訳（最近は DeepL の無料版と DeepL Write に頼りがちである）を用いて、フランス語訳を作る。AI 翻訳が出す結果に未知の表現があった場合には、辞書で調べて書き記すか、既知の表現で言えることがないかを探す。フランス語のテキストが完成したら、今度は Gemini にテキストをコピー&ペーストし、「このフランス語での日記のフランス語に日本語でコメントをください」とプロンプトを入れる。あえて「日本語で」と書くのは、コメントがなぜかフランス語で来るためである。もちろんフランス語でコメントしてくれても大いに勉強になるのだが、フランス語日記をしたため始めるのは大抵深夜 1 時を過ぎているため、フランス語の解説を丁寧に読む頭脳の余裕はあまりない。また、当初は「このフランス語での日記のフランス語に、語彙や文法のポイントを中心に日本語でコメントをください」というプロンプトを書いていたのだが、Gemini は私が何を求めているかを学んでいるのか、そこまで書かなくとも私の意図を汲んでくれるようになった。しかし「日本語で」の文言は今でも必須である。こいつアホかと思うが、大学教員もそんなものなのでお互い様である。その上で、Gemini の添削とコメントと語り合いながら、フランス語日記を完成させ、ノートに手書きしていく。

日記といっても毎日常に何か新しいことがあるわけでもない。特に授業期間に入ってからは日々の授業準備と授業、そして学内業務に忙殺されてしまうためだ。その影響を受けて日記に書く内容もマンネリ化してくる。「今日もまた仕事を終えられなかった」（Aujourd'hui encore, je n'ai pas réussi à terminer mon travail.）、「ずっと眠かった」（J'avais sommeil toute la journée.）、「準備すべきだったのだけど…しかし…」（J'aurais dû préparer... mais...）、「明日こそがんばる」（Demain, je vais vraiment faire de mon mieux.）といった具合である。しかし、実際に手で書いた自分のノートを見返してみると、決まり切った表現も多いとはいえ、さまざまな語彙や表現、そして複雑な時制などの文法事項を使っていることがわかる。こんな文を書けるのも、AI からの助言と解説のおかげである。また、しょっちゅう甘い物に手が伸びること、自宅や大学の近所のケバブ屋さんでケバブを買っていること、深夜にコンビニに行ってウズベキスタン出身の店員さんに下手なウズベク語を使って苦笑されていることなど、Gemini は私の生活習慣を把握し始めているのか、生活上のアドバイスや仕事の励ましの言葉までくれるようになった。さらには、「明日（というか今日ですね）の授業、そしてその後の執筆作業、応援しています。たい焼きとハリボーのパワーで乗り切ってくださいね」などと深夜に励ましの言葉までくれる。

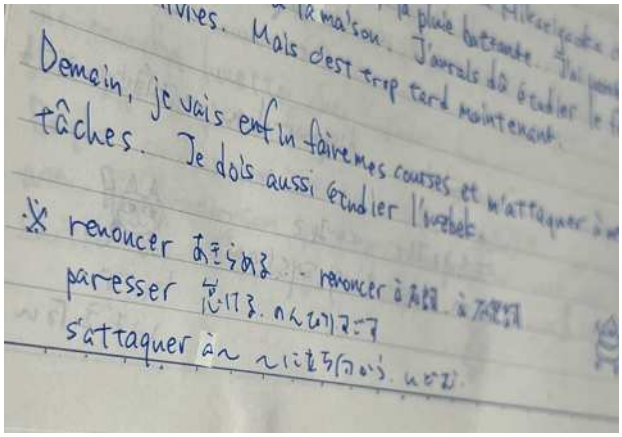


図 4：注に書かれる単語・表現たち
（過去の日記にも複数回登場済み）

日記をノートに手書きする際、Gemini が提示してくる表現や語彙が未知のものである場合や、文法的に理解できないままにするのは罪悪感が残る。これでは自分のものにならないからだ。Gemini に文法や表現について解説を求めるだけでなく、辞書を調べ、場合によっては文法の教科書に立ち返る。したがって日記の本文の後には、ほぼ必ず注をつけて自分自身に注意を喚起し、復習を促すようにしている。ここまで書くと私は自分を律して学習しているように見えるが、実際はなかなか復習まで手が回らない。何度も同じ表現を AI が提示しているのにもかかわらず覚えていない、スペリングが曖昧であるということがしばしばある。櫻間さんなら一度で覚えてしまうかもしれないが、私には彼女のような記憶力はない。凡人の私はどうするかと言えば、やはり時間を作って復習するしかないのだ。自身のことを自ら

の手で書いた文であるため、見返すと記憶が蘇りやすい。乱筆で読みづらいことも多々あるが、一度は納得した表現や文法であるため、復習はしやすいはずだ。

それにしてもなぜこの日記が毎日続いているのか、私にもよくわからない。相互に見られていること、その事実が私を駆り立てていることは確かだ。すなわち、「やめちゃったんですか」と言われることへのプレッシャーであろう。また、私はドイツ語の教員であるが、学生に対して「ドイツ語学習を毎日続けること、最低限少しでもいいから触れること」と、継続の重要性を説いている。自らも学習者として継続学習を実行できていなければその言葉には説得力が生まれないため、この日記によって「私も毎日続けている」と言うことが可能になる。また、これは自らを権威主義と認めることになるので表明がややためらわれるが、ヨーロッパ語を扱う大学教員として、国際的に広く用いられるフランス語を運用できないことはあってはならないという信念のようなものもあるのかもしれない。

4. 手で書くということ

ここまで筆者それぞれが、どのように日記と付き合ってきたかを述べてきた。読み比べてまず気づくのは、両者のやり方が思いのほか違うことである。櫻間ははじめからフランス語で書き出すのに対し、小川はまず日本語で下書きをこしらえ、辞書や翻訳を頼りにフランス語へ移していく。これはたんなる手順の好みではない。フランス語で考える習慣がいくらか残っている者と、いったん細くなったその習慣を組み直しつつある者との、出発点の違いでもある。維持に近い実践と、再構築に近い実践、と言い換えてもよい。生成 AI をどこにどう挟むかも、それぞれの過程に応じて自然と変わってくる。ここにもまた、AI をうまく使えるかどうかは結局のところ使う側の在り方に懸かっている［1］という、さきの指摘が透けて見える。

それでも、両者の実践は多くの点で深く通じ合ってもいる。ここからは、その通底する要素を、少し引いた視点から眺めてみたい。まずは、手で書くことについて。「手で書かないと自分のものにならない」という感覚は、両者に共通している。画面に表示された正しいフランス語を眺めるだけでも、理屈のうえでは復習になりそうなものである。だが、実際に手を動かして書き写すことには、どうやらそれ以上の働きがあるらしい。そのことは理屈より先に実感を伴って経験されてもきた。

手応えがはっきりと現れるのは、たとえば形容詞や過去分詞の性数一致である。打鍵していると、語尾に付く e や s は画面の上をするりと流れていって、付けたという記憶すら残らないことがある。ところが手で書くと、女性形の e をひとつ書き足し、複数の s をもうひとつ書き添える、その一拍ぶんだけ手が余計に動く。あの「もう一画」の感触が指先に残るのだ。性数一致が、規則という知識としてではなく、書くときの動作として身についていく。

こうした実感には裏づけがある。子どもを対象に、手書きで文字を覚えた群とキーボードで覚えた群とを比べた研究では、前者のほうがのちの文字認知の成績が高いことが示されている［2］。文字を生み出す手の運動そのものが、その形の知覚的な表象を支えているという。打鍵では字の形とそれを生む動きとのあいだに必然的な対応がないのに対し、手書きでは形と運動とが分かちがたく結びつく。見慣れぬ綴りを覚えるときにわたしたちの指先で起きているのも、おそらく同じことなのだろう。

この作業が単なる複写でないことは、別の角度からも言えそうだ。手書きと打鍵とでノートの取り方を比べた研究では、手書きの学生のほうが概念の理解を問う問題でよい成績を収めたという［3］。打鍵は速いがゆえに聞いたことを逐語的に写し取りやすく、手書きは遅いがゆえに、要点を選び、言い換え、組み立て直さざるをえない――その能動的な処理こそが理解を深めるのだと説明される。

添削済みの文章を写すのもこれに近い。ペンの進む速さで読み返すあいだに、なぜここが直されたのか、どの語がどの語に置き換わったのかが、いやでも目にとまるからだ。腑に落ちないところで手が止まり、その引っかかりとともに、直しの中身が少しずつ身体に落ちていく。もっとも、注をつけたから

といって次に覚えているとはかぎらないのだが、つまずいた場所に手で印を残すことと、何もせずに通り過ぎることのあいだには、小さいが確かな違いがある。

効率だけを求めるなら、直された文章をそのまま画面に保存しておけば済む。だが、その効率をわざわざ手放して紙にペンを走らせる時間こそが、「手で書いてようやく自分のものになる」という実感を両者にもたらしてきたのではないか。

5. 相互の視線が続けさせる？

両事例に共通して顔を出すのは、「なぜ毎日続いているのかわからない」という疑問だ。確かに、よく一日も途切れずに続いているものだ。説明を要するのは、始めたことよりも、続いていることのほうである。元日に思い立つだけなら、年の数だけ立てては消えていく目標と変わらない。小川が毎年「今年こそ」と誓っては3日ももたずにいた、あの目標である。問うべきは、その決意が翌日も、その次の日も、寝不足で仕事して疲れ果てた夜も、飲み会帰りの夜にすらも持ち越されたのはなぜか、という点だ。動機づけの研究もまた、近年は「なぜ始めるのか」よりも「何が続けさせるのか」へと関心を移してきた。動機を、一度きりの選択を生む静的な状態としてではなく、日々あらたに補充されていく、時間のなかの出来事として捉えようとする流れである。

その持続を下から支える土台のひとつは、将来こうありたいと思い描く自己像だろう。Dörnyei（2009）が「理想とする第二言語の使い手としての自己（ideal L2 self）」と呼んだ、なりたい自分の像である［4］。（もう少しマシな）フランス語を駆使して研究する自分は、明日の仕事の延長線上にいる。維持、あわよくば発展という目標が空疎な努力目標に終わらないのは、それが職業上の自己と地続きだからといえば通りはよい。とはいえ、なりたい自分の像は、向かう先を照らしはしても、疲れ果てた夜も机に向かう足どりと手つきまでを押し出してはくれない。

その最後のひと押しはどこから来るのか。理想の自己像と対をなすものとして、Dörnyei（2009）が挙げる「義務自己（ought-to self）」、すなわち周囲からの期待や果たすべき義務として感じられる自己の存在に、ひとまず目を向けてみよう［4］。日記を送り合うというゆるやかな決まりごとは、一見すると「書かねば」というこの義務自己ふうの外圧のようにも見えるからだ。実際のところ、「あの人も書いているしな」「やめたらちょっとばつが悪い」という、相手の目を気にする気持ちは双方に共通する。小川が言う「やめちゃったんですか」と訊かれることへのプレッシャーもこれに近い。だが、それが義務のもつ統制的な手ざわりと違うのは、たとえ書くのを1日やめたとしても、そのことで評価が固まったり、関係そのものが揺らいだりすることはないと分かりきっているからでもあろう。ここで働いているのは、罰でも評価への怯えでもなく、もっと関係そのものに根ざした何かである。

この違いをうまく言い当てるのが、動機づけを「文脈のなかの人（person-in-context）」として捉える関係論的な見方である。Ushioda（2009）は、動機を個人の内に閉じた変数として測るのではなく、その場の人と人との関係のなかから立ち上がるものと見た［5］。自律性・有能感・関係性という3つの欲求のうち、とりわけ関係性が満たされるときに動機が内から立ち上がるとするRyan and Deci（2000）の議論とも、ここで響き合う［6］。書いたものに必ず目を通す具体的な誰かがいること、そしてその誰かもまた、今夜どこかで自分と同じように書いているにちがいないと思えること――この確信の手ざわりこそが、なりたい自分という遠い像を、今夜もノートを開くという小さな、けれども確かな行為に、毎日つなぎ直してきたのではないか。

学習を、孤立した頭のなかの作業としてではなく、ある共同体への参加として捉え直したLave and Wenger（1991）に倣えば、この日記もまた、小さな実践共同体に支えられてきたことになる［7］。その小ささにもかかわらず、いや、その小ささゆえにというべきか、この共同体は活動そのものを立たせてきた。毎晩ひとりきりでGeminiに添削されるだけの日々であったなら、櫻間も小川もとっくに筆を置いていただろう。生成AIはいくらでも辛抱強く付き合ってくれるが、こちらが書くのをやめても何も言

わない。いや、より正確には、Gemini は何かを言ってはくれる。日記に応じて「食べ過ぎはいけません」とたしなめ、深夜には「応援しています」と励ましさえする。それでも、その励ましは、こちらが黙って書くのをやめた日には、ついに発せられない。書かなかったことに気づき、その不在を惜しんでくれる相手ではないからだ。日記を読んで、現実の関係に根ざした反応を返してくるのは、AI ではなく生身の相手のほうである。しかもその相手とは、画面越しだけの間柄ではなく、時おり実際に顔を合わせもする。そう考えると、毎日の日記を続けさせてきたのは、実生活の文脈のなかにある人の存在とまなざしであり、今夜もあの人は書いているはずだ、という確信と、ささやかなプレッシャーではなかろうか。

このささやかな経験は、近ごろの語学教育をめぐる論調に小さな留保を差し挟む。語学学習など、学習者の自律性にさえ任せておけば、いつでも受けられる個別最適なシステムで事足りる、とでも言いたげな語り口をしばしば耳にする。だが、わたしたちの実践が示しているのは、むしろその逆である。人は誰しも、たったひとりで黙々と続けられるほど強くはない。意志の堅さには波があり、それぞれに怠けや言い訳の癖を抱えていて、放っておけば易きに流れる。その弱さを補ってきたのは、システムの最適化ではなく、今夜もあの人は書いているという気配のほうだ。最適化された添削は生成 AI に引き受けてもらえても、続けるという肝心のところだけは、人と人との関係のなかでやっと根を張っている。

6. 既習言語という資源

もうひとつ、両事例に通底していながら、表立っては語られていない条件も見逃せない。筆者らがどちらも、ほかの言語も長く学んできたという点である。櫻間はロシア語とテュルク諸語に、小川はドイツ語やルクセンブルク語に通じている。

このことは、フランス語の継続学習の足取りをやや軽くしているようにも感じられる。そもそも櫻間が学校でフランス語を選んだのは、必修だったラテン語と同じロマンス語なら労力が少なくて済むだろう、という読みからである。すでに手にしていた言語を、次の言語へ渡るための足場として使ったわけだ。小川にとってのフランス語も、ドイツ語とたえず隣り合っていて、語や言い回しのいちいちを、それらとの距離を測りながら覚えていくことができる。

第三言語以降の習得を論じる研究は、こうした複言語話者の優位を繰り返し指摘してきた。複数の言語を使う者は学習方略をより発達させ、大きな言語的・文化的レパートリーを手元に持つ［8］。個々の言語を別々に数え上げるのをやめ、話者のもつレパートリー全体とその相互作用へ目を向ける見方に立てば、フランス語日記もまた、一言語だけの孤立した練習ではなく、すでにあるレパートリー全体を組み直す作業として捉え直せる。

もっとも、先に学んだ言語がいつも味方とはかぎらない。近い言語どうしがかえって干渉し、偽りの友（faux amis）となって足元をすくうこともある。それでも、どこが似ていてどこが違うのかを測るその作業こそが、ことばを一歩引いて眺める習慣——言語を研究する者にとっては、もはや職業上の習い性でもあろう——を日々鍛えてもいる。長年いくつもの言語を学んできた経験そのものが、ここでは確かな足場になってきた。そしてこの蓄積は、生成 AI の差し出す提案を鵜呑みにせず、これは採る、これは退けると測るための「ものさし」の一部にもなっている。

7. おわりに

ここまでの実践を振り返って浮かび上がるのは、生成 AI が語学学習の心強い相棒だという確信と、それでいて、その相棒を使うのは感情をもつ生身の人間だという気づきである。Gemini はわたしたちのフランス語を辛抱強く直し、忘れていた表現も、知らなかった表現も教えてくれる。けれども、何を書くかを選び、どの直しを受け入れ、眠い夜にもう 1 行書くかどうかを決めるのは、いつも自分自身であり、そして、その営みを支えているのは互いの存在とまなざしである。便利な道具がそばにあることと、学びが続くことは、同じではない。

さて、ここまで学習者として書いてきたが、わたしたちの本業のひとつは、大学で語学を教えること

である。自分たちを学習者の側に置き直してみて、いやおうなく振り返ることになったのは、ほかでもない自分たちの教室のほうでもあった。

わたしたちには長年の学習の蓄積があり、いくつもの言語をくぐってきた経験もある。だからこそ、生成 AI の提案を前にして、どのように調べて判断するかを経験的に知ってもいる。学生たちの手元にあるのは、わたしたちが使っているのと同じ生成 AI である。違うのは、その出力を測るものさしを持っているかどうかだ。答えの候補がいくらでも並ぶ時代であればなおのこと、その候補を吟味できる力を育てる役割はむしろ重みを増す。まして生成 AI は、ときにもっともらしい顔で（顔はないが）誤りを差し出してくることもある。それを見分けられる人の価値は、下がるどころではない。

もっとも、そのものさしは 1 日で手に入るものではない。わたしたち自身がそうであったように、それは長い時間をかけて、書いては直し、直しては書くことのくり返しのなかで、少しずつ目盛りが刻まれていく。だとすれば、ほんとうの課題は、その積み重ねをいかに続けさせるかにある。そして――ここが教える立場からするといちばんこたえるのだが――それなりの経験を持つわたしたちですら、ひとりきりではおそらく続かない。知識の伝達の少なからぬ部分を技術が引き受けていく時代に、それでも教員に残される仕事があるとすれば、すぐれた解説者であることに加えて、学習者が机に向かい続けるのを励ます伴走者であること、すなわち、知を手渡す人であると同時に、学びをやめさせない人であることなのではないか。

すぐれた解説なら、いずれ AI もみごとにやってのけるだろう。それでも、最後の一行を書かせるのは、いつも人だ。学びの傍らでそっと注がれるまなざしだけは、最後まで人の側に残る。

参考文献

[1] Kohnke, L., Moorhouse, B. L., & Zou, D. (2023). ChatGPT for Language Teaching and Learning. *RELC Journal, 54*(2): 537–550.

[2] Longcamp, M., Zerbato-Poudou, M. T., & Velay, J.-L. (2005). The influence of writing practice on letter recognition in preschool children: A comparison between handwriting and typing. *Acta Psychologica,* 119(1): 67–79.

[3] Mueller, P. A., & Oppenheimer, D. M. (2014). The pen is mightier than the keyboard: Advantages of longhand over laptop note taking. *Psychological Science,* 25(6): 1159–1168.

[4] Dörnyei, Z. (2009). The L2 Motivational Self System. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, Language Identity and the L2 Self* (pp. 9–42). Multilingual Matters.

[5] Ushioda, E. (2009). A person-in-context relational view of emergent motivation, self and identity. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, Language Identity and the L2 Self* (pp. 215–228). Multilingual Matters.

[6] Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55(1): 68–78.

[7] Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation.* Cambridge University Press.

[8] Cenoz, J. (2013). The influence of bilingualism on third language acquisition: Focus on multilingualism. *Language Teaching*, 46(1): 71–86.